

## 令和元年度第1回高知県地域学校協働活動推進委員会 会議概要

令和元年11月14日(木) 9:30~11:30

高知県庁西庁舎3階 南北会議室

### 1 開会 (9:30~9:37)

- (1) 高知県教育委員会事務局生涯学習課長挨拶
- (2) 自己紹介

### 2 委員長及び副委員長選出 (9:37~9:40)

委員長として斉藤委員、副委員長として前田委員が選出された

### 3 議事 (9:40~11:30)

テーマ：体験・交流活動の充実に向け、地域住民を巻き込んだ持続可能な仕組みづくり

- (1) 平成30年度実績報告及び令和元年度中間報告
- (2) 令和2年度取組方針について
- (3) テーマ設定について
- (4) 意見交換

#### 【事務局より平成30年度実績報告及び令和元年度中間報告】

(委員長)

ただいま、事務局の各課から平成30年度実績報告及び令和元年度中間報告や令和2年度に向けての説明がありました。何か委員の皆様から質問等ありませんでしょうか。

(委員)

地域学校協働本部事業について、説明の中の27ページの内容で、調査の結果で令和元年度92.4%という非常に高い数値もでており、目標も達成できているという報告もあったが、(地域学校協働本部の)設置基準というのは、市町村からの報告が基準となっているか。特に設置基準に何か定めはあるか。

(事務局・生涯学習課)

特に設置基準というものはないが、本部は運営委員会が設置されていることとコーディネーターが配置されていることが要件となっている。高知県版の実施については別に定める要件がある。活動日数、定期的な協議の場、民生児童委員の参画が要件となっている。

(委員)

登下校防犯プランについて、学校安全対策課から話があった平成16年、17年は広島県や奈良県で誘拐事件があり、私の学校区も、その年100着ほど安全ベストを作って配った記憶がある。ただ、その年は地域の方が見守ってくださるが、年が経過するに従って意識が薄くなる傾向がある。現在、登校時はス

クールガードリーダーが見守りを行い、児童もある程度、まとまって登校していると思うが、問題は下校時。私の学区は現在、新聞配達をしていただいている方に安全ベストを着ていただいて、防犯のひとつになっているのではないかと考えている。高知県内で下校時の防犯を上手く実施している学区があれば教えて欲しい。

(事務局・学校安全対策課)

南国市さんはスクールガードリーダー3名に巡回していただいております、下校時も巡回していただいている。それはスクールガードリーダーのスケジュール次第でということになる。ご質問していただいている、県内で下校時の防犯を上手く実施している取組というのは、現時点で自信を持ってお答えできる事例をもっていない。稲生地区が県内でも非常にまとまった地域で先進的に、組織的に行われている地域と認識している。

登下校防犯プランにあるように1人区間における地域の見守りの目というのを、どうやって担保していくか、出来る人が、出来る範囲で、ながら見守りを増やすことが平成17年当時からずっと言われているところである。改めて色々な人が子ども達の下校時に合わせて犬の散歩をするなど、少しずつ掘り起こしていきましょうといったところがある。また、企業も社会貢献の一環で、巡回する車などにステッカーを貼っていただくことや、駆け込みステーションとなり得るような様々な団体さんが、子ども110番の家だけではなく企業も、例えば銀行のATMがある支店とかに駆け込みステーションになりましょうとか、県内でいうと柔道整復師がいるところに駆け込みステーションになりますよという意思表示をしてもらっているところがあり、学校にもその当時は周知している。しかし、時間が経てばその意識も薄れていくことも課題であり、今後、地域で子ども達のことを考えていく場において、見守りは自分の地域ではどのようにやられているかということを経験多く議論に乗せていただくことをお願いしていきたい。また、他県の事例だが、見守り隊の方々と子供達が一緒になって、登下校のマップを作り、一人一人どういうルートを通っているか地図上に書き表してみると、一人になる区間が結構あるということを確認できる。その区間に対して地域の方々が、どこからどこまでを誰が担当しようねという風なことをやられている事例もある。まず、下校時にどなたが動けるのかを拾い集めてみることから始めていただけるとありがたいと思う。

(委員長)

昨年度や今年度の研修会に参加してみて、ご意見や質問、感想がありましたらお願いします。

(委員)

学び場人材バンクが開催した5月28日の体験活動出前研修会に参加させていただいた。11月26日にある研修会にも参加させていただく予定。まだ、学び場人材バンクの出前講座を活用させていただいたことはない。地域性も踏まえ、自分の1年間のプランを考えたときに、今年はこういうテーマでやりたいなというプランとマッチングしないと見送ることが多い。しかし、長期休業中にどんなことが出来るか、どんな遊びがあるのかと興味があり参加させていただいている。

地域学校協働活動は地域から学校に、「手伝うよ」、「こんなこと協力するよ」などの学校支援の仕組みはできている。その逆で、子どもたちが地域に発信することがなかなか出来ないのが実情。本当の地域学

校協働活動というのは子どもも受け身ばかりではなく、地域に出て行き、地域の子どもたちを社会で守ろうということ、子どもたちからも発信していかないと本当の地域協働にならないし、子どもも育っていないのではないかと思う。もし、そういった事例や活動があれば発表していきたいと考えている。

先月、コミュニティ・スクールのことで丸亀市の研修に参加した際、地域の子どもたちが学校の先生が何も指示しないのにゴミ拾いをするといい活動やお祭りに参加するといった事例を聞いた。その理由を聞いてみると、地元住民が多く関わっているとの事だったので、自分の学校でもいろんな事ができるのかなと思いました。子どもたちが自分たちで出て行けるような環境作りというのをテーマに、研修会で取り上げていただきたい。

(委員長)

地域学校協働活動は大人から子どもへの一方通行といった面はあると感じる。高校生であれば地域に出て行き、調べたことを発信したり、市町村長に政策提言をする取組があったりする。委員が言われているのは、小学生や中学生の取組としてということでしょうか。

(委員)

そうです。今考えているのは、保護者やPTAの方、生徒会、児童会に対して、子どもたちから実施したい活動を提案し、先生方と一緒に考えていただく。先生方の負担が増えない範囲で子どもたちが本当にやれるような取組をしていきたい。

(委員長)

委員のみなさまの中で、小学校や中学校で地域に積極的に発信しているような取組をご存じだったり、あるいはもう既に実践されていることがあれば教えていただきたい。

(委員)

先ほど委員が言われたことに関係しますが、今時代は学校支援から地域連携・協働へという事で色々な学校と地域との連携を進めることによって学校も地域も元気になり、学校と地域がwin-winの関係を実現していくことが一番大事な時代になってきている。委員が言われたように、それを進めるためには、研修という意味において、一つのキーワードとしましては「管理職の意識」になってくると思う。学校にいる校長、教頭を中心に本当に社会に開かれた教育課程実現のために、元気な学校、元気な地域を作るためには大事なことなんだという認識と必要性を感じないと、なかなか進まない。今出来る手段として、管理職を対象にした悉皆研修的なものの中に地域との連携・協働の必要性について深く考えることがあっていい。学校現場は、学校に地域の方が支援をしていただくということに対しての工夫がまだまだできていない。今ある様々な地域との連携行事で比較的進んでいる行事、例えば運動会や文化発表会など、その参加について、子どもたちが地域の方々に案内を書いたり、宣伝などを多くの子どもたちで行う。甲浦中学の場合、保小中の運動会を、甲浦運動会というふうに地域を巻き込んだ運動会に変更した。その中で大人の綱引きを種目として入れた。そしたら100人規模の方が参加をいただき盛り上がった。また、運動会の最後にフォークダンスを入れて、300名近くの参加があり、子どもたちも地域も元気になっていくといったように、今ある地域との連携が進んでいる行事をさらにバージョンアップさせている。

全体研修（地域学校協働活動研修会）の場で実践の発表を2本やっているが学校と地域との連携・協働が進んでいる先進的な事例を1本に絞って行っても良いのではないかと。

（委員長）

確かに管理職の意識ひとつで学校が開かれるかどうかといったところがネックになる。学校の運動会を地域の運動会に変えていくというのは比較的取り組みやすいと感じるが、難しかったり、ご苦労されたことなどあれば教えていただきたい。

（委員）

地域の方も保護者もそこそこ見に来てくれる地域で非常に大きなイベントなので、そこになんとか地域の方々が入っていただくことによって、地域との連携・協働を進めることがこれからの地域づくり、学校づくりには大事である。子どもたちも、たくさんの地域の方々に参画していただくことによって自尊心が高まる。その内容を保・小・中の管理職と共有した。運動会を企画していく中で楽しみもできてくる。実際、練習会を開催すると、80歳、90歳の地域の方が小学生と一緒にフォークダンスを踊っていた。まさしくここに醍醐味がある。今年は例年の3倍の地域の方に参加していただいて、もう早くも来年の話が出てきている。子どもの感想も地域の方の感想も軒並み本当に良かったという声が大きかった。ただ、気をつけないといけないのがケガの問題であるとか、危機管理の面をしっかりとしないといけない。

今ある地域との行事をさらにバージョンアップして、その意義や必要性を感じていくことが重要である。

（委員長）

学校種の枠を超えて連携をつくり、さらに共有のビジョンをもち、そこから連携・協働の動きが始まったというところがポイント。

その他、ご意見等はないか。

（委員）

今年度も資質向上研修に全部参加させてもらっている。防犯対策研修ではロールプレイで不審者対策をさせてもらったが、それがすごく良かった。認知症のおじいちゃんが学童保育中に中に入ってきたことがあったが、子どもをすぐ避難させることもでき、その学びが生かされた。いつも座って聞く研修が多いが、ロールプレイで出来たことが良かったという声も聞かれた。ステップアップ研修会も、私は6年目だが、毎年参加させていただいている。基本というのがすごく大事だなと思って毎年参加するが、毎回新しい気持ちで帰って来られるので、今後も連続講座は実施していただきたい。

研修内容は子どもに対して、支援員がどうするかというのが多い。現場から複数名で同じ研修を受けてくるが、その受け止めが人それぞれ違っている。研修内容を上手く現場に生かせる人と生かせない人がいるというのが何故なのか考えているところ。現在、7人職場だが、7人とも家庭環境が異なり指導員自身が抱えている課題も多いので、良い情報を得ても素直に受け取れなかったり、素直に表現できないところが現状としてある。自分の学童は去年度から絵本セラピストとあって、絵本を読みながら自分を振り返っていくということをしたが、今年になってとても職員同士の変化を感じる。発達の勉強や防災など、と

でも重要であるが、人として褒めてもらうことや認めてもらうことなど、セラピー的な研修も試しに検討してもらいたい。

(委員長)

学童保育の指導員さんに限らず、あらゆる専門的な職種の方で、例えば公民館の職員さん等が成長していく際の最も有効な研修の機会になっているのが、県の研修というよりも、職場での振り返りミーティングが一番の研修の機会になっているという調査結果もある。職場での振り返りミーティングのやり方とか技法を学ぶような、振り返りの仕方を学ぶような研修があれば、充実した振り返りミーティングが職場の中でなされていくのではないかと感じる。

(委員)

先ほどの委員の意見を聞きながら、現場で関わっている方の声というのはとても大事である。充実した研修を企画していて、参加者数を見ても多い。しかし、結果どうだったかという参加者の声は非常に重要。アンケートはあるが、その場で書くとなっても簡単なコメントしか書けない。次回どのような研修を求めているかという声があれば、是非聞いていただきたい。

高知市の児童クラブの先生方の声を聞いても、多様な子どもたちの対応に困っている。発達障害などの研修会もあるが、ケースによって関わりが難しいということがあるので、どういうことで困っているか、参加者同士で意見を共有することも設定してあげたらいいのではないかと。研修会では講師の方の話を聞いて、少し質問の時間があって閉会ということもある。自分自身も子どもの声を聞くという仕事をしているので、講師で呼ばれたときに、こちらからの声を伝えるだけではなくて、その場に参加された皆さんにお時間を取って話し合ってくださいという場面を取ることで、日頃困っている場面を共有し、どうすれば良いかを情報交換することによってヒントを持って帰ることが出来る。研修の構成や時間設定を工夫できれば良い。

(委員長)

悩みを語るということが解決への第1歩となる。アンケートを通じた次の研修のテーマに関する要望を聞くような機会はもうすでに行っているか。

(事務局・生涯学習課)

アンケートの中に今後どのような研修を受講されたいですかといった項目を入れている。また、現場や市町村訪問の際にニーズを聞き取っている。今年度は6月に、ある児童クラブを訪問した際、支援員さんから、全国的に色んな子どもが巻き込まれる事件・事故があったので、不審者対策が不安であるとの声があり、急遽予定していた研修テーマを変更して防犯の研修を実施した。高知県警とも日程調整ができ、7月の実施に至った。今後も時期を得た研修会を実施していきたいと考えている。

(委員)

高知市では児童クラブの支援員が正規雇用と臨時雇用で300人弱ほどいる。その支援員の研修会について、8月の長期休業中を除いて、児童クラブが始まる前の午前中の時間を利用して月1回実施してい

る。支援員からは児童の状況と状態を把握し、家庭の状況が多様化していると聞いている。そこで、子ども理解のための方法や発達障害など発達に課題がある児童の対応をどうすれば良いかなど検討している。また、児童クラブではおやつを出すのでアレルギー対策にも関心があり、エピペンの使い方を講師の方に習って実施している。それ以外に特別支援科会という場において、発達に課題があり多動性が少し心配といった支援員がいると、その方々だけを集めて、実際の事例に基づいた声を聞き、それを参加者で考えて、どういう対応をしたら良いのか、グループワークをして、それに対して講師の方がアドバイスをするような研修を設けたりしている。先ほど登下校の防犯のことについてご発言があったが、下校の時に自転車でウロウロされている方がいるなどの情報があり、不安に思うこともあり、来年2月には不審者対策の研修を行う予定である。放課後児童クラブは高知市を8地区に分けてブロック長さんからどういった研修を行いたいかという意見を吸い上げて企画している。高知県の方で定期的に開催されている研修は、高知市が呼べないような講師の方をお呼びして実施していただいている。なお、高知市の方でもより一層の充実を図るという意味で研修を実施している。

(委員長)

高知市の方でも相当に充実した研修を展開されている。その中で市では出来ないような研修を県にと  
いう話題があり、市と県で上手く役割分担（棲み分け）が大切になってくる。

(委員)

先ほどの地域との連携でいうと、高知市子ども未来部子ども育成課は地域子育て支援センターを所管  
している課である。地域の中での実践ということで、(放課後児童クラブは)児童の放課後にとって大切  
な生活の場になっているのでそこから帰る時に放課後の防犯ということで地域の方と連携して考え  
ていきたいと考えている。そういった取組の先進的な事例について研修などを通じて紹介していただき  
たい。

(委員)

研修について、自分自身PTA活動をずっとやっており、研修に集まってきてくれる方は良いが、問題は  
参加してくれない方。どこかの自治体が子どもに詐欺防止のアナウンスをさせ、警察から子どもに表彰を  
したというニュースがあった。アプローチの方法として、子どもを使う方法は良い手段である。

(委員長)

それでは、研修に関しての意見交換はここで閉じさせていただく。  
続いて、協議に移りたいと思う。事務局より説明をお願いしたい。

**【事務局（生涯学習課）よりテーマ設定について説明】**

(委員長)

説明の通り、体験・交流活動に関して地域差が出てきている。放課後子ども教室や放課後児童クラブ、  
地域学校協働本部で組織ごとに差が出ていたり、実施の内容や回数に濃淡がみられるということで、この

濃淡や差をどう縮めていけばいけば良いか、そのための持続可能な仕組みづくりはいかにあるべきか、今回私たちが協議するテーマとなる。この件について、委員のみなさまからご意見、ご質問等ないか。

(委員)

持続可能な仕組み作りということで、私の学校区で実施している方法は小学校の年間スケジュールが大変忙しいので、学校行事と公民館活動や防災会などの行事を同じ日にするというのが、結局持続可能な仕組みではないかと思っている。具体的には6月の第4日曜日が小学校の参観日だが、その日に地区全体の避難訓練を実施している。教員も参観日なので避難訓練に参加出来る。また、11月の最終日曜日は小学校の学習発表会と公民館の文化祭を実施している。午前中に学習発表会を見に来た人が午後からは公民館の方に参加する仕組みを作っている。最近始めた地区のびわもも祭りは6月の第2日曜日というように日を決めている。小学校側からしてみても日が決まっているからスケジュールが立てやすいし、公民館や防災会にしてみても、小学校と打ち合わせや準備がスムーズに行える。年間スケジュールが固定化されることによりマンネリになるかもしれないが持続可能な仕組みに繋がる。私の学校区は小学校と公民館が近く、公民館の活動日を小学校も把握しているので小学生が総合の学習の時間を使って授業したい場合、公民館の活動の日に合わせていることが可能である。双方がスケジュールを合わせれば持続可能な仕組み作りにつながる。割と簡単にできるのではないかと考える。

(委員)

先ほど委員が言われたとおり、高知市内でも学校から参観日であったり学校行事の時に地域の防災会であったり、青少年育成団体と連携して行事を実施している。そうすることで地域の方も保護者も子どもたちが中心になるので、参加率も高く、身になっているという事例もたくさんある。高知市では地域連携協議会において、小学校区内の地域の諸団体の行事をカレンダー式に取り上げ、学校と一緒に出来る行事を繋げている中、地域でも協力してくれる団体はたくさんあるが、その人たちが学校に入り込んで何をしたいかが分からないことが課題としてあげられる。コーディネーター機能が十分機能しておらず、地域学校協働本部でも地域コーディネーターがとても苦労している。学校には何か行事をやるときには地域の方と一緒にやる意識をもっていただくことが大事なことである。

(委員長)

先ほどの委員が言われたように地域の行事と学校の行事を同じ日にセッティングするというのは大事なことだとは思いますが、地域の中でも様々な慣例であったり考え方があったりする中で、地域の行事と学校の行事を同じ日にセッティングするというのは、上手くいかない部分があるのではないかと。仮にあったとしてもどう乗り越えられているのか。

(委員)

日程を合わせて連携することにあまり反対意見はなく、参加率も上がったり、満足度も上がったりしている。

(委員)

小学校であれば開かれた学校づくり推進委員会という組織があるので、その中には諸団体の方が委員として参加している。その場で学校が困っていることを投げかけることにより、地域の方が解決策を提案してくれることもたくさんある。具体的には、地域で様々な野菜を作っている方に協力していただき、食育学習が実現した。開かれた学校づくり推進委員会も会議の在り方や運用方法を見直すことで、地域との連携がより一層進んでいくのではないかと考えている。中学校では学校運営協議会に委員として参加しており、学校の困り事を協議している。その場において議決されたことを教育委員会へ要望として提出し、意見をもらうことも出来る。やはり、学校や地域、関係団体等、みんなが集まる場で話をして決めていくということが大事である。

(委員)

学校と地域がどうやってベクトルを合わせていくかというのは大事な部分である。持続可能な仕組みというのを考えたときに、教職員には異動がある。校長が変わって地域との連携がとてもしんどい疎遠になったりすることもある。ところが、地域の方には異動があまりない。そこで、持続可能な体制を作るには組織が必要である。校長が変わっても、その組織で協議を深めていく仕組みを継続していくことが重要である。先ほど話題にあがった学校運営協議会では学校、保護者、地域の代表を委員としている。その中で、どんな子どもを育てるか、体験活動の意味づけやその取組（行事）のために何をやるのかといったことを協議する権限と責任が与えられているのが学校運営協議会である。これを全ての学校の校区につくことにより、学校と地域の持続可能な連携は間違いなく進んでいくと考えている。

加えて、学校運営協議会で決まったことを実際どう実践していくかを考える必要がある。地域には学習支援や環境整備などの強みがある方がいる。その方々に学校行事へ参画していただくために地域学校協働本部が必要になってくる。学校運営協議会と地域学校協働本部が両方あり、一体的に推進していくことにより、学校と地域の連携は持続可能な体制として確立していく。

現在、甲浦中学校では、保・小・中の管理職と地域の代表者にも関わっていただき、学校運営協議会をつくる準備をしている。次に、今ある地域学校協働本部の質を高めていくという取組を進めているところ。持続可能な体制づくりのために、組織を作って協議をしながら進めていく体制が一番大事だと思う。

(委員)

学校運営協議会や地域学校協働本部が話題に上がったが、私の学校区では、その委員しか活動内容が分からないといったことが無いように、地域の方にも学校応援便り（活動報告）を作成し、全家庭に見てもらえるように回覧したり、インターネット上にアップしたりしている。そうすることで、地域の方の意識は変わり、持続可能につながるひとつの手段になるのではないかと考えている。

(委員長)

ここまで委員のみなさんから出していただいた意見を中間的に少しまとめさせていただくと、地域の行事と学校の行事、あるいは様々な関係団体・組織の行事をできるだけ同じ日に設定し、地域全体での年間計画（スケジュール表）を立てていくということがポイントになっていくのではないかと考えている。それから、年間計画を立てていく上では、学校の困りごとや、あるいは地域の困りごとを学校に相談するという、双方

向の関係性の中で集まる場があり、協議や話し合いの場があることが大事になってくる。南国市の稲生地区であったり、高知市の潮江地区のように、長年にわたって地域の方々が学校の困りごとを話し合うという蓄積があるところは割とスムーズにできるのではないかと。また、コミュニティ・スクールや地域学校協働本部を立ち上げようというところは、まず、話し合いのテーブルをつくることが大事になってくる。先ほど委員が言われたように、一部の地域住民の方達だけではなく、全ての住民の方達に取組を知ってもらい、いつでも参加できるような、開かれた組織、開かれた話し合いの場になっているということも大事になってくる。

(委員)

高知市の児童クラブでは長期休業中の午前中に講師を招いて体験活動等を実施している。持続可能な仕組み作りにつながるかどうかは分からないが、新・放課後子ども総合プランの中で、児童クラブと子ども教室の取組を一体型や連携型で取り組むことを持続可能な仕組み作りという風に捉え、先進的な事例を紹介していただきながら、私たちも取り組んでいかなければいけないと考えている。児童クラブと子ども教室は国の所管課が違うが、上手く融合出来たら良いと思う。

(委員長)

文部科学省の方が、放課後子ども総合プランということで放課後子ども教室と放課後児童クラブの連携を謳い始めたのが2007年くらいで、10年以上経つが、この10年の間の歩みを振り返るとある程度連携や協働は進んだのでしょうか。

(委員)

高知市の場合、放課後児童クラブは学校の余裕教室や敷地内に専用棟を建設し実施している。子ども教室は学校の余裕教室を使って開催しているので、距離的な近さはある。しかし、実際にどういったことをやれば一体型になるのか、それぞれの運営主体が話し合った上で行事等を決めていくということを踏まえて実施していくということが大切になってくると思う。

(委員)

私も放課後子ども教室をコーディネートしているが、まず子どもが行きたくなるような子ども教室、それから親が行かせたいと思う子ども教室にしないといけない。現在、年間240日程度実施しており、4月に保護者会を実施し、長期休業中の実施内容についての説明会も行っている。説明会は7月上旬に行い、活動内容も提示する。保護者には興味のある活動に来て、帰りたいときに帰っていいという、緩い条件でやると、子どもも来やすくなる。また、現段階で1年後の1つの計画が決まっており、代休などを使って芋掘り遠足を企画している。地域の方は毎年やっているのだから、来年の苗は確保するからねと言ってくれる。計画をしっかりとすることで活動も参加しやすいし、親も助かる。

(委員長)

計画を立てることによって、先の見通しがつくというメリットが生まれる。それで参加のしやすさが生まれている。

(委員)

先ほど委員から参加してくれない人にどう対応するかという話がでたが、やはり家庭事情等によって、興味があってもなかなか参加し辛いという家庭もある。入学式であったり、就学時健診の場面であれば、どの家庭の方も参加しているので、そういった場面を活用し、地域の行事等が入ったカレンダーを配布するなどして、情報提供し、参加を呼びかける。一人でも行って良かったという声があれば、それに関連して、次の行事への参加意欲にも繋がる。学校もそういった広報の一助になるような取組を進めていってもらいたい。

(委員)

学校もある程度の行事を発信している。社会に開かれた教育課程の実現に向けて、地域との連携・協働で、どんな子どもたちを育てるか、そのために地域の方とどうベクトルを合わせて地域の人的、物的資源を活用していくかを考える必要がある。去年もやってきたから今年もとか、何年もやっているから今年もということではなく、スクラップ&ビルドをしていかなければならない。この教育活動が子どもの成長と幸せにつながっているのか、それをより幸せなものにするためには地域の力は大きい。その中で教育活動を見直していくという作業が学校現場でも始まっている。私は1年目であるが、今年から変えた部分も引き継いだ部分も振り返りを大事にしながら、来年度に向けてスクラップ&ビルドをしていかなければいけない。子どもにとって教育効果が大きいものはどんどん取り入れながらやっていきたい。

(委員)

情報発信の部分で、学校から発信される紙ベースのものは保護者は全然読まない。子どものランドセルの中に詰め込まれている。子どもも親にプリントを出さないと怒られるので学童に捨てて帰ったりする。そこで、校長先生に相談し、使い方の是非はあると思うが、学校に登録している緊急メールで必要な情報発信をしてもらっている。保護者もメールなら見るし、各学年で保護者のグループラインに登録し情報共有することで保護者に見てもらえて、効果も高い。

(委員)

潮江東小学校と潮江中学校では、学校メールがあり、年度当初に保護者に登録してもらおう。そのメールで学校行事や各学年の行事について、学校から発信してもらっている。登録している保護者はそれを見るので、ペーパーを見るよりは効果が高い。例えば、運動会の準備に困っていますなど情報発信すると手伝いに来てくれたりする。SNSは今とても大事な情報発信ツールであると感じる。

(委員長)

メールは一昔前の情報発信ツールであり、今はSNSが主流の時代となっている。フェイスブックやインスタグラム、ラインなど色んなツールがあるので、各学校の保護者の方々の一番使っているものに上手くアクセスできるとより有効に情報が発信できる。

(委員)

持続可能な仕組みというのを私も知りたいと思っている。私の勤務している学童は長期休業中など、週

に3回講師の先生を呼び、イベントを企画しており、学び場人材バンクにもお世話になっている。しかし、子どもたちが講師に失礼な事を言ってしまったたり、物を壊してしまったりすることもある。子どもたちがいつもと違う状況に興奮してしまい、講師に迷惑をかけるので、頼みにくいということもある。体験活動など多くさせてあげたいが、保護者もそこまで期待しておらず、放課後の居場所としての機能を望んでいる。体験活動として過去に地域の方に協力してもらい芋掘りを企画したことがある。畑が好きな人はこだわりがあり、「ここ踏んだらいかん」、「ここ抜いたらいかん」など注意されることが多く、結局子どもが嫌になる。地域の方も子どももストレスを感じてしまうということがあった。

(委員長)

委員の発言は大変重要な指摘だと思う。体験や交流活動に差があるというところで、この現状をどのように捉えるかといった際に、善意に解釈すれば本当は体験・交流活動をたくさんさせてあげたいが、それが出来ない事情や何か理由があるのではないか。その事情や理由を突き止めることが、持続可能な仕組み作りにとって重要ではないか。やんちゃな子どもがいると、講師を呼ぶにも萎縮してしまう大人の感情であったり、指導員さんの配慮があったりすることが分かった。

それでは、予定の時間を過ぎているので、まだまだ協議は深まりそうであるが、ここで協議の場は閉じる。委員の皆様から大変重要な意見が出たので、今後の研修の企画や施策の改善に役立てていただきたい。それでは事務局に議事進行をお返しする。

#### 4 閉会 (11:30)

生涯学習課長挨拶